

延岡市学校教育研修所

I	研究主題と副題	・・・・・・・・	12-1
II	主題設定の理由	・・・・・・・・	12-1
III	研究の目標	・・・・・・・・	12-1
IV	研究の仮説	・・・・・・・・	12-1
V	研究組織	・・・・・・・・	12-2
VI	研究の全体構想	・・・・・・・・	12-2
VII	研究内容		
1	基本的な考え方	・・・・・・・・	12-3
2	国語科研究班の取組	・・・・・・・・	12-4
3	社会科研究班の取組	・・・・・・・・	12-5
4	算数・数学科研究班の取組	・・・・・・・・	12-6
5	理科研究班の取組	・・・・・・・・	12-7
6	外国語活動・外国語科研究班の取組	・・・・・・・・	12-8
7	ICT研究班の取組	・・・・・・・・	12-9
8	小中連携の推進	・・・・・・・・	12-10
VIII	成果と課題	・・・・・・・・	12-10
○	引用・参考文献		
○	研究同人		

I 研究主題と副題

「確かな学力を身に付けた児童生徒の育成」
～言語活動の充実と ICT の効果的な活用並びに小中連携を図る授業づくりを通して～

II 主題設定の理由

1 学習指導要領の改訂から

中央教育審議会答申(平成 20 年 1 月 17 日)では、「言語は、知的活動(論理や思考)だけではなく、コミュニケーションや感性・情緒の基盤でもある」とし、「学校が各教科等の指導計画にこれらの言語活動を位置付け、各教科等の授業の構成や進め方自体を改善する必要がある」と提言している。

各教科等では、基礎的・基本的な知識・技能を「習得」とともに、観察・実験をしてその結果をもとにレポートを作成する、文章や資料を読んだ上で知識や経験に照らして自分の考えをまとめて論述するといったそれぞれの教科の知識・技能を「活用」する学習活動を行う。これらの学習の基盤となるのは言語に関する能力であり、そのために各教科等で言語活動を充実させることが大切である。

言語活動の充実を進めていくことは、授業改善に深くつながる。児童生徒が自ら課題を設定し、思考したり判断したりしながらそれらを解決していく授業を構成する上では、児童生徒自身の言語活動を活発なものにしていくことが必要である。

2 延岡市教育委員会の教育施策から

延岡市教育委員会においては、『わかあゆ教育プラン』を策定し、延岡市の「未来をひらく人づくり都市宣言」を基本理念とし、義務教育 9 年間を通じた小中一貫教育と教育コミュニティではぐくむ教育を積極的に推進している。中でも「確かな学力を付ける教育の推進」を重点的な取組として、「学力向上」「理数教育の充実」「読書教育の推進」を進め、「レベルアップ延岡」学力向上協議会を中心に、小中連携による学力の分析と具体的な到達目標の設定、実践・検証を進め、学力向上の改善策を探っている。また、教職員の資質向上を図るために、学校教育研修所の研修活動の充実が進められ、より実践的な研究が期待されている。

3 延岡市学校教育研修所の役割と責任から

これまで本研修所では、計算力向上と読む力の伸長、家庭学習の充実の取組等、学力向上を支える研究と実践の積み重ねを土台としながら、言語活動の充実のための手立てと方策、習得と活用の考え方を究明し、市内の先生方への情報提供及び授業提案を軸とした実践的な研究を進めてきた。

本年度は、言語活動の充実と ICT の効果的な活用についての研究を継続して進めるとともに、「小中連携」を新たな視点に加えた授業づくりをし、『わかあゆ教育プラン』を具現化した授業提案を行うという実践的な研究を進めることにした。

国語科、社会科、算数・数学科、理科、外国語活動・外国語科、ICT の 6 つの班を編制し、それぞれの教科等の特性を生かした研究を進め、授業改善の考え方、手立てについても提案していく。

このことによって、それぞれの学校で授業改善が図られ、児童生徒の学力が向上し、本市教育の充実・向上に資することができると考える。

III 研究の目標

1 児童生徒の学力を向上させるための方策について、教科等(国語科、社会科、算数・数学科、理科、外国語活動・外国語科)の特性を生かした言語活動の充実の在り方を探るとともに、ICT の効果的な活用と小中連携を図る。

2 延岡市内小中学校全体の授業の質を向上させるために、「わかあゆ教育プラン」を具現化し、授業研究会を通して成果を広める。

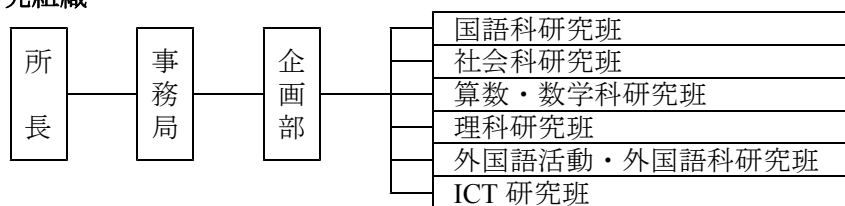
IV 研究の仮説

1 教科等における言語活動の充実についての研究を深め、問題解決的な単元構成、授業構成を工夫改善すれば、授業改善につながり、児童生徒の学力向上を図ることができるであろう。

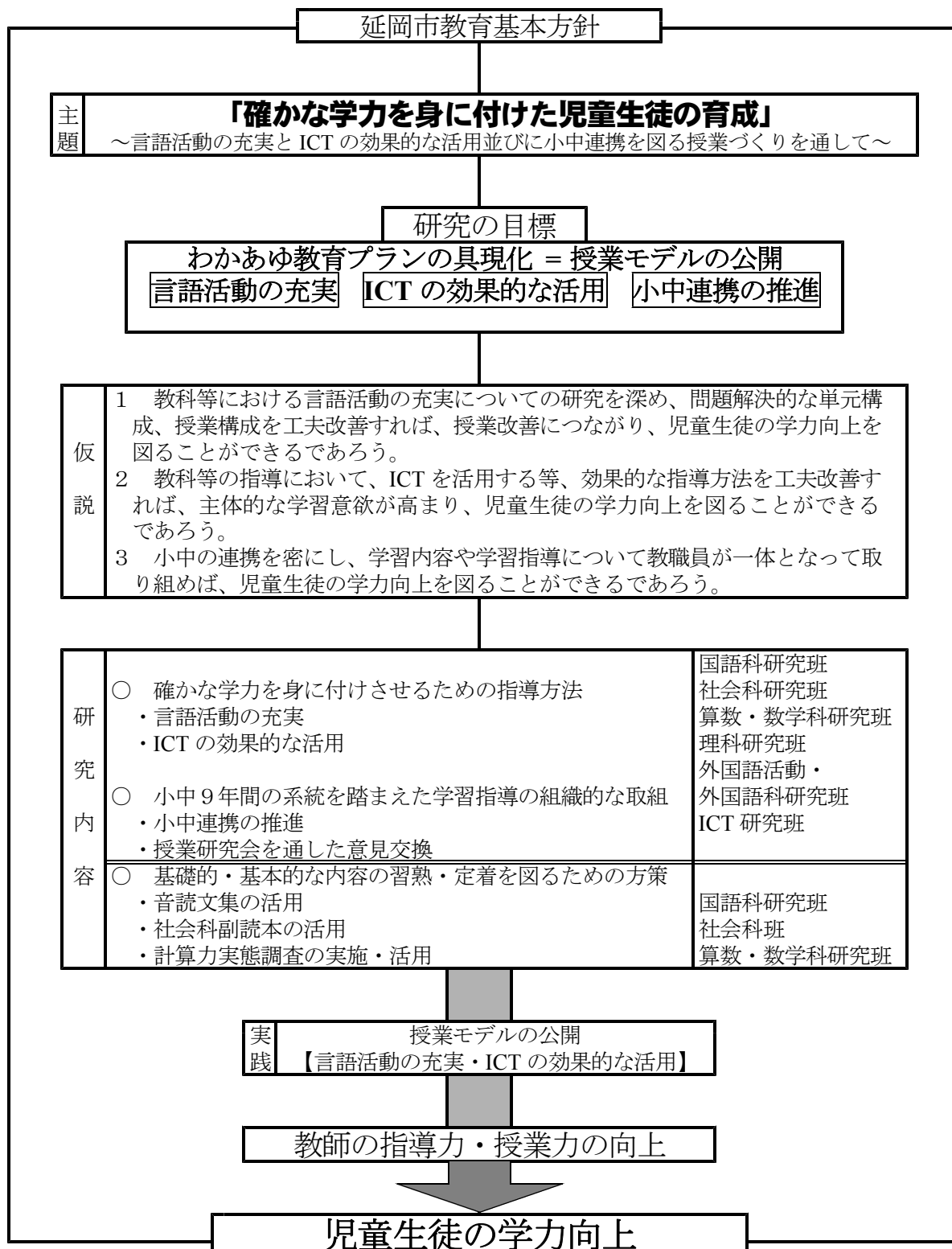
2 教科等の指導において、ICT を活用する等、効果的な指導方法を工夫すれば、主体的な学習意欲が高まり、児童生徒の学力向上を図ることができるであろう。

3 小中学校の連携を密にし、学習内容や学習指導について教職員が一体となって取り組めば、児童生徒の学力向上を図ることができるであろう。

V 研究組織



VI 研究の全体構想



VII 研究内容

1 基本的な考え方

(1) 「習得」と「活用」の定義

確かな学力を育成するために、各教科では基礎的・基本的な知識・技能の習得を重視するとともに、知識・技能の活用を図る学習活動を充実することが求められた。

そこで、本研修所では、次のように習得、活用について定義付けを行った。

習得	～ 基礎的・基本的な知識・技能を身に付けさせること。「知識」を詰め込むのではなく、「知識」の意味内容を身に付けさせる。
活用	～ 習得した知識・技能をより現実的な、あるいは複雑な事態において使うこと。（「理解」の確認は、自分の「理解」をことばによって、文章で表現させることで可能になる。）

(2) 学習過程における活用

学習過程における活用としては、次のような学習活動が考えられる。

- | | | |
|-------------|---------------|------------|
| ・知識を利用する。 | ・知識を生かす。 | ・知識を当てはめる。 |
| ・知識を比べて考える。 | ・知識をまとめて表現する。 | |

(3) 「活用」と「言語活動」

活用することは思考力を高めることであり、そのためには言語活動は欠かせないものである。学習活動に言語活動を取り入れるだけでは、言語活動の充実が図られたことにはならない。大切なことは、言語活動を行うことで、学習のねらいが達成されたかどうかということである。

(4) 言語活動の充実

言語活動の充実には、言語活動を通して児童生徒の考えの深まりが見られることが重要である。つまり、児童生徒が自分の考えを吟味、熟考、評価することが必要となる。

言語活動の充実を図るための主な方法として、以下のような学習活動が挙げられる。

- | |
|-------------------------|
| ・他の意見と聞き比べる（違いに気付く） |
| ・他の意見を取り入れる |
| ・考えを再構成・再構築する |
| ・自分の考えの変容を振り返る（自己評価する）等 |

学習のねらいを達成するためにふさわしい言語活動を選定することが大切である。

(5) わかあゆ教育プランの具現化

ア 常任研究員による授業公開

わかあゆ教育プランに掲げる「授業のモデル」を具現化し、授業公開を行うことを主な内容とする。国語科、社会科、算数・数学科、理科、外国語活動・外国語科、ICTの6つの班で研究を進め、授業研究会を通して、参観された先生方とよりよい授業の在り方を探る。

イ 授業実践の在り方

○ 言語活動の充実を図る。

授業の中で、

- | |
|---------------------------|
| ① 「自分の考えを記述する」場面 |
| ② 「自分の考えを伝え合う」場面 |
| ③ 「自分の考えを再構成する」場面 の設定を行う。 |

○ ICTの効果的な活用を図る。

授業の中で最も効果的な場面に、適切なICT機器の活用を図る。

○ 小学校、中学校の研究員が協力し、「小中連携」を推進する。

（具体的な姿）

- ・小・中学校の研究員が協力して授業づくりを行う。（各班そして全体研で）
- ・小・中学校とも授業改善の視点を明確にし、共通した実践を行う。
- ・小・中学校のつながりを意識し、単元計画や学習活動に学習内容を位置付ける。（例えば、既習事項の確認で小学校の学習内容について振り返る。レディネステストで学習内容の定着状況を把握し、単元の指導で生かす。等）
- ・授業研究会を通して、指導方法の在り方を交流する。

2 国語科研究班の取組

(1) わかあゆ教育プラン

「話す・聞く力」「書く力」「読む力」を確実に習得させる国語科指導を推進し、他教科や日常生活における言語活動の基盤となる国語力育成を図る。

ア 読むこと・・・「言語活動の充実と読解力」「読書力・音読力」の向上

イ 話すこと・聞くこと・・・「対話力」の向上

ウ 書くこと・・・「簡潔に書く力」「思いを豊かに表現する力」の向上

(2) 実践

小学校第5学年 物語の構成に気をつけて読もう「世界でいちばんやかましい音」

ア 読むことの取組

(ア) 言語活動の充実の工夫

言語活動を充実させるために、単元を貫く言語活動を位置付けた国語科の授業を展開することにした。授業を実践する上で、以下の点に着目しながら言語活動の充実を図った。

- 本単元で付けたい力を見極める。
- 単元を貫く言語活動を設定する。
- 思考や判断を促す具体的な発問や指示を工夫する。
- 付けたい力にあった各教科の特性を踏まえた言語活動を設定する。

言語活動の充実を図るためには、本単元でどのような国語の能力を育成するのかを明確にした上で、そのためにふさわしい言語活動を児童の実態に合わせて単元を貫いて位置付けた。

(イ) 読書力の向上

市立図書館の貸出を利用し、並行読書として、起承転結の明確な物語を教室内に配置し、休み時間等に活用できるようにした。また、朝の会のスピーチにおいて、おすすめの本の紹介を取り入れ、表現力の向上と共に読書意欲の向上を図った。

(ウ) 音読する力の向上

授業では毎時間、いろいろな音読方法を紹介しながら、音読の時間を設定した。また、朝の会の内容に全員で声を出す機会を設定し継続して行った。

イ 話すこと・聞くことの取組

(イ) ペア・グループ学習

授業でグループ活動を積極的に位置付け、ペアや小グループでの話し合いを行った。その中で自分の思いや考え、願いをしっかりと伝え合うことができることを目指した。ペア・小グループで話し合いをすることで、全体でも発表ができるようにした。そして最終的に一人でも自信をもって堂々と発表できる児童を育てていくことをねらった。

ウ 書くことの取組

(ウ) 物語のあらすじに似たオリジナル物語を書く活動

物語の4つの構成（設定・展開・山場・結末）の読み取りと並行して本文のあらすじに似た物語を完成させていくことで、物語の構成をより理解したり、物語のテーマを深く読み取ったりした。また、自分だけのオリジナルストーリーを書く作業を設定した。

エ ICTの効果的な活用

国語科ではICTの積極的な活用はやや難しい面がある。今回は導入場面において、インターネットでの漢字の読み取りクイズと、プレゼンテーションで物語のあらすじを紹介する部分において活用した。

(3) 成果と課題

○ 児童に身に付けさせたい力を明確にとらえ、単元を貫く言語活動を設定した国語科授業の在り方について、授業づくりを通して再確認することができた。

● その単元・各時間において確実に身に付けさせるためには、指導内容や扱う言語活動を精選し、軽重を付けて思い切った単元計画の実践が必要である。

3 社会科研究班の取組

(1) わかあゆ教育プラン

小・中共通した問題解決的な学習

段 階	学習内容	育成する力
学習問題	○ 学習問題の設定	「資料を活用する力」の育成 ○ 情報を読み取る。 ○ 傾向をとらえる。 ○ 関連付けて読み取る。 ○ 特徴に応じて読み取る。 ○ 収集したり、選択したりする。 ○ 整理したり、再構成したりする。 「社会的な見方や考え方」(思考・判断・表現する力)の育成 ○ 調べたことや考えたことを相手に伝わるように自分の言葉でまとめる。 ○ 根拠や解釈を示しながら、図や文章などを使って説明する。
予 想	○ 学習問題に対する予想 ○ 調べる方法	
調 査	○ 図やグラフ等を活用しての調査 ○ 見学を通しての調査	
議論・発表	○ 調査結果の発表 ○ 考えの再構成 ○ 他者の考えの共有	
結論 (まとめ)	○ 学習のまとめ	
新たな疑問	○ 次時の学習問題の設定	

(2) 実践

中学校第1学年 世界各地の人々の生活と環境「寒暖の差が激しい土地にくらす人々」

ア 言語活動の充実

(ア) 話し合い活動の設定

学習課題である「なぜ、シベリアは寒いのに、窓を大きくしているのだろうか？」についてペアやグループでの話し合いを通して、根拠や解釈を示しながら図や文章を使って、自分の言葉で説明できるようにした。

イ ICTの効果的な活用

(イ) デジタル教科書の活用

デジタル教科書を活用し、寒暖の差が激しい地域で暮らす人々の住居の特色を読み取らせた。また、シベリアの気候の特色を考える際にも、デジタル教科書の中のシベリアと宮崎の雨温図を活用した。

(イ) 大型スクリーンの活用

大型スクリーンを活用し、バイカル湖の夏と冬の写真を見せて、シベリアの気候の特色についてイメージをもたせた。

(3) 成果と課題

- 資料を基にして話し合い活動を行ったことで、生徒は根拠をもち、自分の言葉で発表することができた。
- デジタル教科書を活用し、シベリアと宮崎の雨温図や写真を提示する際、資料を拡大したことで、資料の見方を丁寧におさえることができた。
- 資料から分かることを、個人で十分に考える時間を確保する必要がある。
- 資料を考察することを苦手とする生徒のヒントカードを工夫したり、資料を精選したりする必要がある。

4 算数・数学科研究班の取組

(1) わかあゆ教育プラン

自力解決の場면을重視した学習の流れ ※「しっかり教える」「じっくり考えさせる」場面においても明確にする。

段 階	学 習 活 動								
つかむ	○ 学習問題の把握								
見通す	○ 解決の見通しと答えの予想								
調べる 深める まとめる	○ 自力解決と学び合いの場面 <ul style="list-style-type: none"> 既習の知識や技能を活用したり、絵や図、具体物、式、表、グラフなどを使って自分なりの方法で問題を解いたりする。 集団で練り合い、考えを深めたり広げたり、良さに気付いたりする。 <言語活動の充実を図る指導の工夫> <table border="1" style="float: right; margin-top: 10px;"> <thead> <tr> <th>内 容</th> <th>説明する力を高めることば</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>順序</td> <td>「まず」「つぎに」「最後に」</td> </tr> <tr> <td>理由</td> <td>「なぜなら」「だから」</td> </tr> <tr> <td>効果</td> <td>「この式は、この図でいえば…」</td> </tr> </tbody> </table> <ul style="list-style-type: none"> 説明する力を高める言葉を提示し、話合いで活用させる。 言葉、数、式、図、表などを用いて、説明させる。 友達の意見を受けて、自分の考えを再構成・再構築させる。 	内 容	説明する力を高めることば	順序	「まず」「つぎに」「最後に」	理由	「なぜなら」「だから」	効果	「この式は、この図でいえば…」
内 容	説明する力を高めることば								
順序	「まず」「つぎに」「最後に」								
理由	「なぜなら」「だから」								
効果	「この式は、この図でいえば…」								
身に付ける 活かす	○ 習得・活用の場面 <ul style="list-style-type: none"> 学習したことを活かして、自分の力で練習問題に取り組む。 発展的な問題や補充的な問題等、自分に合った問題に挑戦する。 学習内容や学び方について自己評価する。 								

(2) 実践

小学校第4学年 面積「面積の求め方の工夫」

ア 言語活動の充実

(ア) 「面積の学習で使う算数用語」「説明マスター」の掲示

面積の学習において、説明するときにかかすことのできない「面積の学習で使う算数用語」を提示することで、算数ならではの用語を用いて求積方法を説明できるようにした。また、「結論を述べる」→「筋道を立てて説明する」の流れに沿って説明できるよう、「説明マスター」を掲示した。(他単元でも活用できるようにした。)

(イ) 「説明ヒントカード」の工夫

上述した「面積の学習で使う算数用語」「説明マスター」をもとに、本時に生かせるような「説明ヒントカード」を作成した。A4用紙の上部に書き方の例を示し、下部に穴埋め式で答えられるようにした。

イ ICTの効果的な活用 ～フラッシュ動画の活用～

(ア) つかむ段階（導入の段階）における工夫

毎時間、つかむ段階（導入の段階）において、前時までに学習したことを振り返るフラッシュ動画を準備し、短時間でテンポよく復習した。主な内容は、面積の学習で使う算数用語、長方形や正方形の面積を求める公式、かけ算九九で解ける程度の求積、単位換算等である。特に本時においては、フラッシュ動画の中にシルエットクイズを入れることで、本時学習内容の足がかりとなる内容も含めた。

(イ) 身に付ける・活かす段階における工夫

本時の学習内容は、切り離したり、貼り合わせたりと複雑な動きをしながら面積を求めなければならなかった。そのため、複合図形が、どのように長方形や正方形に分かれるのか、どのような形をした長方形からどの部分を切り取ったのかがよく分かるよう、動画を使って復習をした。



(3) 成果と課題

- 説明マスターがあることで、どの児童も説明活動に取り組むことができた。
- どのような考え方であるかを、ICTを活用し、視覚的、動的に提示することができたため、学習内容理解の手助けとなった。
- 説明マスターだけに頼らず、学年が上がるにつれて、自分の表現方法で説明できるような指導をしていく必要がある。
- 「具体物・半具体物」等の方が、児童の学習に役立つこともある。教材研究を十分に行い、学習効果が得られると考えられるICTの活用を図る必要がある。

5 理科学研究班の取組

(1) わかあゆ教育プラン

小・中共通した問題解決的な学習

段階	学 習 活 動	留 意 事 項
学習 問題	○ 学習問題の設定	○ 問題意識と見通しがもてる事象を提示する。 ○ 生活経験や既習内容と結び付けて説明したり感じたことを発表したりできるようにする。
予想	○ 検証方法 ○ 結果の予想	○ 生活経験や既習内容と結び付けて検証の方法や結果の予想を説明できるようにする。
観察 実験	○ 目的意識をもった検証 ○ 他者の考えの共有	○ 目的をもった活動ができるようにする。 ○ 結果について話し合う場を設定し、比較して妥当性を検討できるようにする。
考察	○ 科学的な言葉を使った説明 ○ 学習のまとめ（学習問題にかえて結論付ける。）	○ 科学的な概念を使用して考えたり、解釈を加えて説明したりすることができるようにする。 ○ 科学的な言葉（キーワード）を使って簡潔にまとめることができるようにする。

(2) 実践

小学校第6学年 ヒトや動物の体のつくりとはたらき「呼吸のはたらき」

ア 言語活動の充実

(ア) 実験結果について共有し、考察につなげる板書

本時では、予想を確かめる実験を二つ用意し、班ごとに選択させた。全ての班の実験結果について板書で示し、学級全体の結果から考察させるようにした。

(イ) キーワードを活用した表現

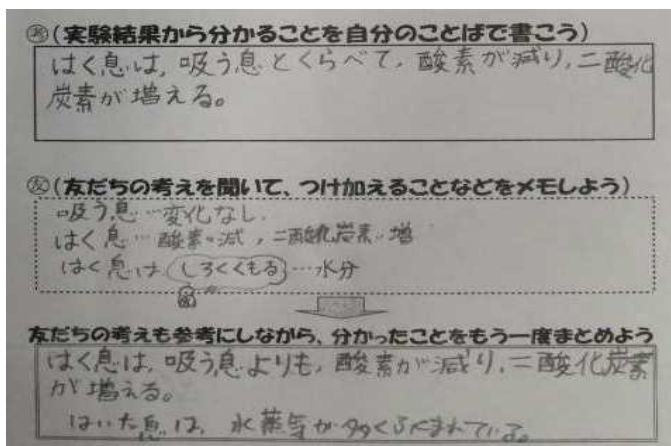
本時の学習内容は「呼吸」ということから、気体の変化に焦点化して学習を進めるようにした。予想の段階から、「酸素」、「二酸化炭素」というキーワードを示して、見通しをもたせながら学習を展開し、まとめにもつなげるようにした。

(ウ) 自分の考えを記述し、伝え合い、再構成するためのワークシートの工夫

結果から分かることを、自分のことばで書かせた後、班で意見交換をする時間を設定し、友達の意見も参考にさせながら再度、まとめる時間を設定した。

イ ICTの効果的な活用

呼吸に関する仕組みや、新出の語句（本時では『肺』）の確認をする際に、大型テレビを活用した。教科書のイラストをタブレットコンピュータで撮影し、注目させたい部分を拡大表示しながら提示した。



児童のワークシート

(3) 成果と課題

- 児童に問題解決的な学習のパターンが、身に付きつつある。また、班で意見交換をした結果、自分のまとめに付け加える等、考えを再構成する姿や自信をもって考えを発表する姿が見られた。
- 大型テレビを活用したことで、教材・教具の準備が効率的にできたとともに、テンポよく学習を進めることができた。
- 自分の考えを再構成する時間を確保するために、教えるところと考えさせるところを明確にした授業づくりが大切である。
- ICT を活用する部分と、掲示資料を作成する部分を区別し、授業の中に取り入れることが大切である。

6 外国語活動・外国語科研究班の取組

(1) わかあゆ教育プラン

授業づくりのポイント

小学校	1 体験的な活動の充実 外国語を用いてコミュニケーションを図る楽しさを体験したり、日本と外国の言語や文化について、体験的に理解を深めたりすることができる授業を行います。
	2 聞く・話す活動の重視 外国語に慣れ親しむため、積極的に外国語を聞いたり、話したりする活動を取り入れた授業を行います。
中学校	1 言語活動による定着と活用 言語活動の充実によって、知識・技能の定着を図るとともに、活用する力を高める授業を行います。
	2 4技能の総合的な育成 「聞く」「読む」を通して得た知識等を、「話す」「書く」を通して発信する授業を行います。

(2) 実践

小学校第5学年 Lesson9 What would you like? 「BENTO をつくろう」

ア 言語活動の充実

(ア) 場面設定の工夫

児童に身近な「弁当の日」と関連付けて、「BENTO」を作るという必然性を意識した場面設定を行った。お店屋さんとお客さんに役割を分けて活動させた。一人一人に役割を与え、教材を十分に準備することで、たくさんの友達とコミュニケーションをとらせた。



(イ) コミュニケーションのポイント

「目を見て」「聞こえる声で」「反応を返して」「ジェスチャーをつけて」というコミュニケーションのポイントを押さえながら授業を行った。

イ ICT の効果的な活用

食べ物の写真を映し出ししながら、ALT の声を録音した音を聞かせ、発音させた。また、まとめの段階で実物投影機の活用により、自分の作った BENTO を紹介させた。

(3) 成果と課題

- 必然性を意識した場面設定を行うことで、児童は多くコミュニケーションを取ることができた。また、「～のためのお弁当」という視点をもたせることで、意欲的に自分の思いを伝えることができた。
- コミュニケーションのポイントを押さえることで、外国語を使って多くの友達と楽しく会話ができた。
- 効果的に ICT を活用することで、児童に多くの英語を聞かせ、発話させることができた。
- ALT の声を録音して、食べ物の写真をプロジェクターに映し出しながら発音させることで、リズムよく復習できた。また、児童に学ばせたい英語を精選することもできた。
- 楽しむだけの活動ではなく、知的好奇心を養うための工夫が必要である。



7 ICT 研究班の取組

(1) わかあゆ教育プラン

- ア 多様で豊富な教材を提示できるとともに、教材・教具の準備が効率的にできるようになる。
- イ 授業のほんの一場面でも ICT を使うことで、より学習効果が上がる。

(2) 実践

ア デジタル教科書の活用

デジタル教科書は、教科書と同じ内容を拡大提示することができ、児童生徒の集中力を高め、同じ内容について共通理解を図りながら授業を進めることができた。その他にも動画や音声、立体的な映像での説明が可能になり、理解を深める手助けとなった。また、必要な資料のみを提示することにより、必要以上の情報を与えることなく、児童生徒に考えさせることができ、思考力を高める際にも有効であった。



ア) ペンタブレットの活用

デジタル教科書やその他の資料等を大型モニターに映した際に、ペンタブレットを使って画面上に書き込みをしたり、様々な機能を操作したりすることができた。また、教師の説明に使用するとともに、児童生徒の発表の支援を行うことができ、伝える力を高める手助けとして活用することもできた。

イ その他の機器の活用

ア) 電子黒板の活用

テレビ枠型などがあるが、表示画面に直接タッチして操作するため様々な場面において活用した。



イ) 実物投影機の活用

手元の実物や見本を拡大するため、演示や発表への活用ができた。

イ) タブレットコンピュータの活用

起動が速く、カメラ機能や録音・録画機能があるため、様々な場面での活用ができた。また、通信機能も活用することができた。

基本 OS によっては、一般的なコンピュータで作成したデータやソフトウェアが活用できるため、文書作成ソフト、表計算ソフト、プレゼンテーションソフトをそのまま使用したり、教材ソフトをインストールして使用したりすることができた。



(3) 成果と課題

- デジタル機器を活用することで、効果的な教材を必要に応じて提示することができ、児童生徒の思考力を高める手段として有効であった。
- 児童生徒が興味・関心をもって学習に取り組むことができた。また、自分の考えの説明を円滑に伝えることにも活用できた。
- より効果的な ICT の活用方法を、今後も延岡市全体で検討していく必要がある。

8 小中連携の推進

延岡市学校教育研修所常任研究員会は、国語科、社会科、算数・数学科、理科、外国語活動・外国語科、ICT の6つの研究班があり、それぞれ、小学校2名と中学校1名の教職員3名で構成されている。この研究組織で小中連携を推進し、目標を共有し、学習内容や学習指導について共通理解、共通実践を行うことで、児童生徒の学力向上を図ることができると考えた。

主な取組として、各研究班で小学校、中学校、それぞれにおける学習内容や系統性について確認し合い、単元の系統を意識した学習指導過程の工夫や授業づくりを行った。そして、全体で協議したものをわかあゆ教育プランを具現化した授業モデルとして、市内の教職員を対象に年間6回の研究授業で公開した。授業研究会は、研究班によってはワークショップ形式で実施するなど、小学校と中学校の教職員が活発に意見交換できるよう運営上の工夫を行った。

VIII 成果と課題

1 成果

- 授業展開を工夫し、授業の中に意図的に言語活動を取り入れることで、自分の考えをふり返り再構成・再構築することができ、学力向上につなげることができた。
- ICT を効果的に活用することで、児童生徒の学習意欲が高まり、学習内容を視覚的・聴覚的に理解させることができ、思考を深めることができた。
- 授業研究を小中共同で行うことで、学習内容の系統性を理解し、授業づくりに役立てることができた。同時に児童生徒の発達の段階の違いから、授業の進め方などの共通点や相違点に気づき、9年間を見通した学習指導の在り方を考えることができた。

2 課題

- 学習のねらいを達成していくためには、各教科の特性に応じた言語活動を選定し効果的に取り入れていく必要がある。
- 学習効果が得られる ICT の活用をさらに市全体で共有していく必要がある。
- 小中連携の関連として、指導方法や ICT に関する情報活用能力を明確にし、さらなる連携を図る必要がある

○ 引用・参考文献

- ・文部科学省：『学習指導要領』（小学校・中学校・総則編・解説）2008
- ・文部科学省：『言語活動の充実に関する指導事例集』2011
- ・延岡市教育委員会：『わかあゆ教育プラン』平成26年度版
- ・延岡市常任研究員会：『平成25年度常任研究員会研究報告書』

○ 研究同人

延岡市学校教育研修所	所 長	瀬戸山初博
延岡市学校教育研修所	事務局長	平田 博司
延岡市教育委員会学校教育課	指導主事	西村 浩一郎
常任研究員	統括主任	高城 克洋（土々呂小学校）
岡田 京子（東海東小学校）	佐藤健太郎（伊形小学校）	緒方 久恵（土々呂中学校）
鶴田 博幸（岡富小学校）	永倉 直樹（東小学校）	永田 文昭（北浦中学校）
田爪 鉄平（南小学校）	遠山浩太郎（恒富小学校）	井島沙央理（恒富中学校）
原田 建一（東海小学校）	小野 秀俊（旭中学校）	牛島 香菜（緑ヶ丘小学校）
鈴木 直美（南方小学校）	真方 明恵（西階中学校）	大竹進太郎（旭小学校）
湯浅 泰晃（北方学園小学校）	中野 克洋（北方学園中学校）	